

サチヨ・イトーの舞踊公演

ニューヨーク在住の舞踊家、伊藤さちよの主催する「サチヨ・イトー・アンド・カンパニー」の公演が、五月十二、十三日、市内のメアリー・マウント・マンハッタン劇場で開かれた。

伊藤はニューヨーク大学大学院教育学部舞踊学科でMA（修士号）取得後、過去十四年間、ニューヨーク大学、ジュリヤード・スクールを含むいくつかの大学で日本の古典舞踊を教えてきた。一九八一年に舞踊団を結成、以来、全米各地の大学、ボン、ダブリンなどの国際ダンス・フェスティバルで公演を続けてきた。一九八八年六月には、沖繩舞踊の研究でニューヨーク大学よりPhD（博士号）の学位を授与されている。

舞踊家としての伊藤はきわめて多才であり、歌舞伎舞踊、能、地唄舞、沖繩舞踊を学び、アメリカのモダン・ダンスのテクニクもとり入れ、「西洋と東洋の舞台芸術の統合」ともいえるべき独自の世界を創っている。今回の公演はダンス・マガジン五月号で、「五月には幅広いジャンルとテクニクを代表する舞踊家達が公演を行なうが、彼らの中でも最も堪能で、この上なく優美な日本人舞踊家」と筆頭に紹介された。

公演プログラムは、松村禎三作曲「詩曲」に新しく振り付けた「線と弧」、沖繩舞踊「南洋千鳥」、高村光太郎の詩集「千恵子抄」に取材した「千恵子・元素」、コミカルなマイム・ダンス「そば屋にて」、大手拓次の同名の詩に振り付けた「手の色の相」などであった。

この公演の舞踊評は、五月十八日付で、ニューヨーク・タイムズ紙に掲載された。担当した舞踊評論家、ジャック・アンダーソン氏は、「サチヨ・イトー・アンド・カンパニーにより西洋のモダン・ダンスと伝統的な日本舞踊が融合された」と書き、更に「上演作品は洗練されたチェスチュアに満ちていたが、凝り過ぎを見せた瞬間もあった」と批評している。たとえば、伊藤の創作「千恵子・元素」についてアンダーソン氏はチェスチュアが過剰であったと述べているが、十七絃等の音楽と光の檻を想わせる照明の中で、伊藤は精神病に冒された千恵子の状況をきめこまやかに、しかも気迫に満ちた演技で的確に表現していた。また伊藤と五人の俳優によって演じられた「そば屋にて」では、そば屋店内での光景を生き活きとしたパントマイムで表現し、アンダーソン氏は「プログラムにユーモアのある味をつけ加えた」と評している。

沖繩舞踊の手・腕の動きを採集し、「女神」の曲に振り付けた「あけもどろ」「月の光」「手の色の相」等、伊藤は日本の古典舞踊のテクニクをベースに、西洋のモダン・ダンスとの統合を果たしていた。ニューヨーク在住の日本人舞踊家たちの中で、今後の活躍が期待される一人である。

（ニューヨーク在住・三浦由紀子）

「邦楽と舞踊」1989年12月号